

編集室

《さびしさは鳴る。》と印象的な文章で、綿矢りささんの『蹴りたい背中』は始まります。金原ひとみさんの『蛇にピアス』とともに第130回芥川賞受賞の話題作です。

ともに20歳で、綿矢さんは早稲田大学2年生。若さと「女性作家」に話題が傾くなかで、「現在の文学界はすでに女性作家でもっている……かつての芥川賞にはそれを評価するセンスがなかっただけの話」と文芸評論家の斎藤美奈子さんが軽い「毒」を放っていて痛快でした。

Hakumon

ちゅうおう

2004

早春号

2004年(平成16年)3月24日発行 No.184

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393

東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

広報課 ☎0426-74-2146

印刷

泰成印刷株式会社

〒130-0026

東京都墨田区両国3-1-12

☎03-3631-8141

以前あった「サントリー・ミス터리大賞」は、唯一、公開の選考会が特色でした。その席で選考委員の開高健さん(故人)は、「オリジナルな一行と出合いたい。それだけが私の選考基準」と言ったものでした。オリジナルな一行。ことに書き出しの一行には、大作家も悩み、「おれは無能だ」と当り散らしたといったエピソードにも事欠きません。卒業の日。社会人への一歩、それぞれの「書き出しの一行」を心に書きとめてほしいですね。多様な表現で。のちに、人生という作品を振り返り、原点をみつめるためにも。

(広報課 田中紘太郎)